福岡市埋蔵文化財調査報告書第894集

博 多 108

── 博多遺跡群第150次調査報告 ──

2006

福岡市教育委員会

序　　文

福岡市は古くから大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人・物の交流は盛んで、その結果数多くの歴史的遺産が培われて今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、市内の遺跡把握に努め、時には発掘調査を行って記録保存という形で往時の有り様を後世に伝えています。

本書は平成16年度に行いました、博多150次調査の内容について報告するものです。この調査では中～近世にかけての多くの遺構を検出することができました。本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する御理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料として御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において費用の負担をはじめとする御協力を戴きました、西山建設株式会社をはじめとする関係各位に深く感謝申し上げます。

平成18年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　植　木　とみ子

― 例　　言 ―

・本書は福岡市教育委員会が2005年１月17日から３月29日にかけて行った博多150次調査（博多区中呉服町66番）の報告である。調査は藏冨士寛が担当した。
・本書の執筆、編集等は藏冨士が行った。尚、遺物実測の一部は米倉法子の手を煩わせた。
・出土銅銭については、埋蔵文化財センターにクリーニングをお願いした。製図・分析等は埋蔵文化財センター片多雅樹氏の手によるものである。
・本書における輸入陶磁の分類については、以下の文献を参考にした。
太宰府市教育委員会編1983『大宰府条坊跡』ＸＶ　―陶磁器分類編―　太宰府市の文化財　第49集
・本書における方位は座標北であり、遺構については、井戸（SE）、土坑（SK）、溝（SD）、等の略称を使用している。
・本書に関わる資料は、この後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

目　　次

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経緯……1

2．調査の組織……1

Ⅱ　調査の経過

1．位置と環境……2

2．調査の方法……3

Ⅲ　調査の記録

1．調査の概要……3

2．第１面の調査……6

3．第２面の調査……11

4．第３面の調査……11

5．特記遺物……22

Ⅳ　おわりに……22

挿図・表目次

図１　博多遺跡群（１ /25.000）
図２　博多98・100・150次調査（１ /40）
図３　土層（１ /80）
図４　第１面遺構配置（１ /80）
図５　第１面検出遺構（１ /60）
図６　石敷・礫群（１ /40）
図７　第１面検出遺構出土遺物１（１ / ３）
図８　第１面検出遺構出土遺物２（１ / ３）
図９　第２面遺構配置（１ /80）
図10　第２面 SK074（１ /30）
図11　第２面検出遺構（１ /60）
図12　第２面検出遺構出土遺物（１ / ３）
図13　第３面検出遺構（１ /60）
図14　第３面遺構配置（１ /80）
図15　第３面 SK・SE 出土遺物（１ / ３）
図16　第３面 SD（１ /80）
図17　第３面 SD050・051出土遺物（１ / ３）
図18　第３面その他の SD 出土遺物（１ / ３）
図19　SP・遺構面掘り下げ中出土遺物（１ / ３）
図20　漁撈具など（１ / ３）
図21　出土銅銭（１ / １）

表１　銭銘別出土銅銭一覧
表２　遺構別出土銅銭一覧

図 版 目 次

図版１　第１・２面調査区南西側（北から）
図版２　上　第１・２面調査区北東側（北東から）　下　第１・２面調査区北東側（南から）
図版３　上　石敷・礫群（南西から）　中　SK074（南東から）　下　SK071（南から）
図版４　上　第３面調査区南西側（北東から）　下　第３面調査区南西側（北から）
図版５　上　第３面調査区北東側（南から）　下　第３面調査区北東側（西から）
図版６　上　第３面検出 SD　中　SD050・051（西から）　下　SD050（北西から）
図版７　上　SE095（南から）　中　第３面ピット群（北西から）　下　土層（北東から）
図版８　出土遺物

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経緯

平成16年６月９日、株式会社西山建設より、博多区中呉服町66番における共同住宅建設に関して、埋蔵文化財の有無に関する照会がなされた。この地点は博多遺跡群の範囲内であることから、埋蔵文化財課では試掘調査を行い、現地表下220cm の地点で遺構の存在を確認した。

この結果を受けて、両者協議の結果、遺跡への影響は避けられないということになり、遺跡の記録保存という形での対応が採られることとなった。

発掘調査の開始は2005年１月17日。３月29日にすべての作業を終了した。調査にあたって、株式会社西山建設を始めとする関係各位には、多大な御協力を賜った。記して感謝したい。

２．調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査委託　株式会社西山建設
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　埋蔵文化財課　課長　山口譲治
　　調査第２係長　　池崎譲二
調査庶務　　鈴木由喜
調査担当　調査第２係　　藏冨士寛
調査作業　寺園恵美子　小路丸嘉人　永田優子　池聖子　小池温子　増田ゆかり　中野裕子
　　永田律子　阿部幸子　早川　浩　幸田信乃　夏秋弘子　吉川暢子　薗部保寿
整理作業　柴田加津子　萩本恵子　日名子節子

遺跡調査番号	0479		遺 跡 略 号	HKT －150	
地　　番	博多区中呉服町66番		分布地図番号	48千代博多	
開 発 面 積	200㎡	調査対象面積	180㎡	調 査 面 積	120㎡
調 査 期 間	2005．1．17～2005．3．29				

Ⅱ　調査の経過

１．位置と環境

博多遺跡群は古代末～中世を中心とし、存続期間も弥生時代から近世にいたる複合遺跡であり、福岡平野を流れる那珂川、御笠川に挟まれた砂丘上に存在する（図１）。この砂丘は東西に長い３列の砂丘によって形成されており、通常、内陸側の２列を「博多濱」、外側の１列を「息濱」と呼んでいる。調査地点は息濱の内陸側端部にあり、北西側には近接して、第98次調査、第100次調査が行われている（図２）。

第98次調査では計４面の調査が行われ、12世紀後半～13世紀前半を中心とした、12世紀前半から14世紀にいたるまでの遺構が検出されている（大庭編1998）。第100次調査では計３面の調査が行われ、12世紀後半から近世までの遺構が調査されている（大庭編2002）。また、この調査では、第２面において大形の溝（001号遺構）が検出されており、今回報告する溝（SD050・051）との関連も窺うことができる。

文献

大庭康時編1998『博多64』―博多遺跡群第98次調査の概要― 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第559集 福岡市教育委員会

大庭康時編2002『博多81』―博多遺跡群第100次調査の概要― 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第707集 福岡市教育委員会

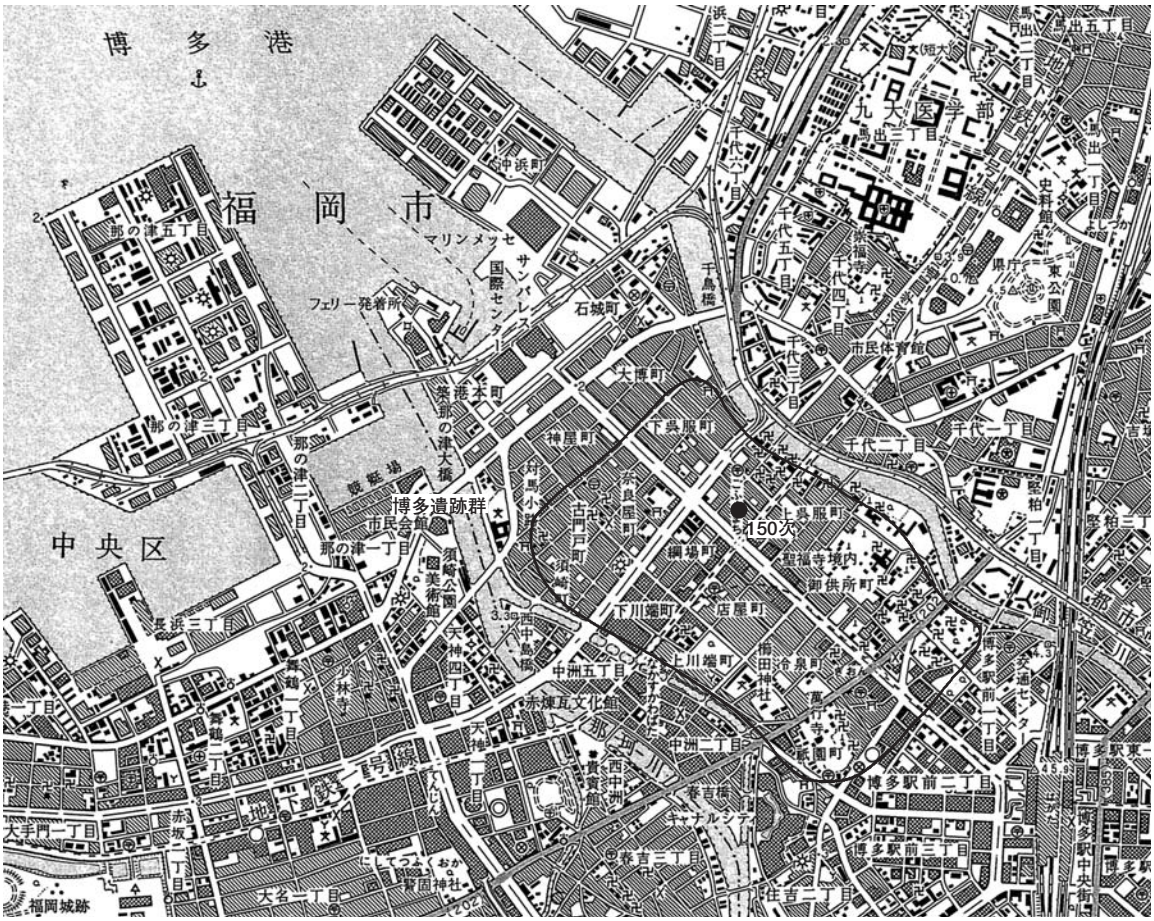

博多港
福岡市
中央区
九大医学部
中浜町
マリンメッセ
サンパレス
国際センター
フェリー発着所
石城町
千鳥橋
港本町
築港那の津大橋
那の津五丁目
那の津三丁目
那の津二丁目
那の津一丁目
博多遺跡群
市民会館
須崎公園
美術館
150次
大博町
神屋町
下呉服町
上呉服町
千代五丁目
千代四丁目
千代三丁目
千代二丁目
千代一丁目
市民体育館
東公園
聖福寺境内
御供所町
綱場町
下川端町
店屋町
上川端町
中洲五丁目
中洲二丁目
赤煉瓦文化館
西中島橋
天神四丁目
天神一丁目
長浜三丁目
舞鶴一丁目
舞鶴二丁目
大手門一丁目
赤坂二丁目
大名一丁目
福岡城跡
春吉橋
キャナルシティ
春吉三丁目
住吉二丁目
博多駅前二丁目
博多駅前三丁目
博多駅中央街
博多駅東一
交通センター
櫛田神社
紙屋町
馬出五丁目
馬出三丁目
馬出一丁目
史料館
県庁
地下鉄
地下鉄空港線
地下鉄七隈線
地下鉄箱崎線
地下鉄七隈線
地下鉄箱崎線
地下鉄空港線
地下鉄七隈線
地下鉄箱崎線
地下鉄七隈線
地下鉄箱崎線
地下鉄七隈線
地下鉄箱崎

図２　博多98・100・150次調査（１/40）

２．調査の方法

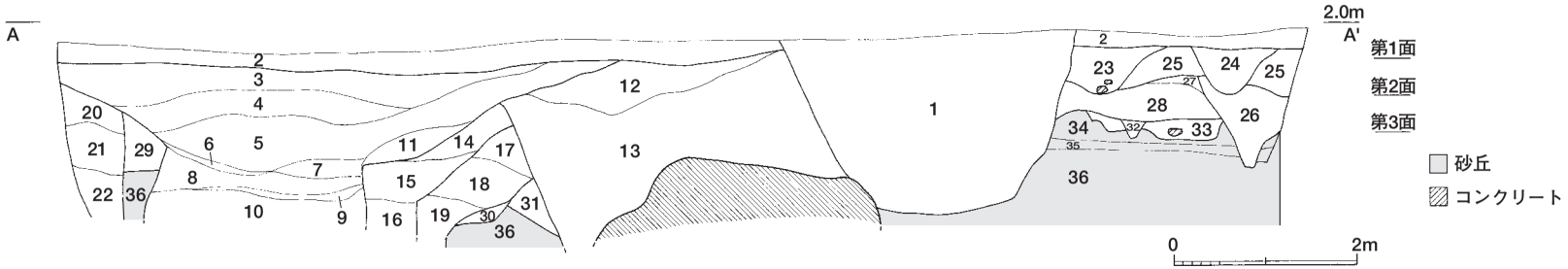
表土および攪乱部分を深さ２ｍ程除去した後、標高1.6m前後の暗褐色砂層上から調査を開始した。排土処理の関係上、調査区を２つにわけて調査を行っている。今回は３面を設定して、調査を行った（図３）。第１面は近世以降の整地部分である、暗黄褐色・暗褐色砂質土層下の暗褐色土上面に設定した。標高は1.6m前後である。そして第２面は40cm程掘り下げた暗褐色土上としている。標高は1.2m程。そして第３面の設定は砂丘面である暗黄褐色砂質土上に行っている。標高は0.8m前後である。尚、第３面においては黄褐色粗砂層に至るまでの掘り下げを行い、遺構の把握に努めた。

Ⅲ　調査の記録

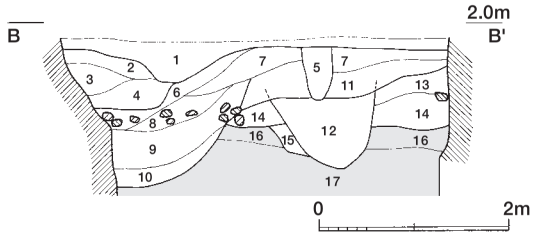
１．調査の概要

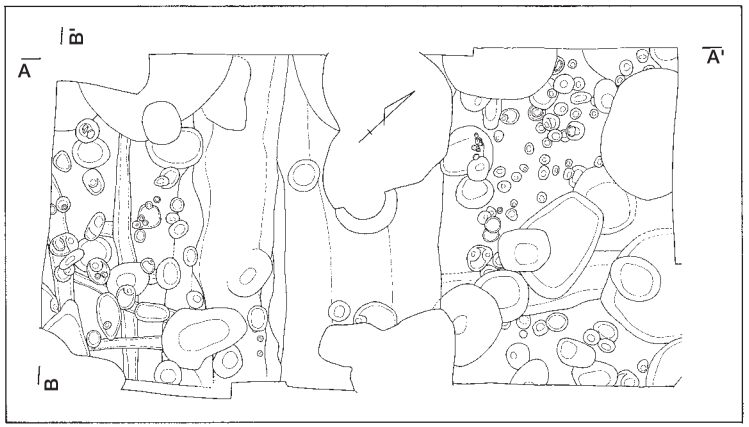
先にも述べたように、今回の調査は計３面を設定して調査を行っている。遺構の存在する調査面の違いは、必ずしも時期差を示しているものではない。第１面では井戸（SE）、土坑（SK）、ピット（SP）、そして調査区南東側において、石敷・礫群を検出している。第１面検出の遺構はいずれも16世紀後半～17世紀以降のものである。第２面では、井戸、土坑、ピット、溝（SD）、石組遺構（SK）等を検出している。検出遺構の数は少ない。遺構は近世、そして13世紀代のものである。第３面では井戸、土坑、ピットの他、多数の溝を検出している。多くの遺構が存在しており、これらは11世紀後半～13世紀を中心とする。尚、出土した土師器杯・皿の底部はすべて糸切りによるものである。

以下では、各面における主要遺構の内容、出土遺物に対する所見を述べる。



1 暗灰　しまりなし。**SK25**。
2 暗黄褐・暗褐　暗黄褐砂質土・暗褐砂質土が互層状に堆積。炭・焼土が多く混入する。
3 褐　黄褐色粘土、ブロック状に混じる。**以下、11層までSE39**。
4 褐　３に似る。焼土を含む。
5 暗褐　ややシルト質で、粘性が強い。礫混じる。
6 黄褐砂　粗砂。
7 暗黄褐砂　汚れた粗砂層。
8 黄褐砂
9 黒褐　シルト質。薄く堆積。
10 黄褐砂
11 暗褐砂
12 暗褐色砂　黄褐色粘土粒を含む。**以下13層までSE40**。
13 褐色　炭、焼土含む。
14 暗褐砂　炭多く含む。**以下、16層までSE59**。
15 褐砂　比較的均質。
16 暗褐砂　炭・焼土含む。
17 褐　砂質。混入物少なく、白味を帯びる。**以下17～19層、不明遺構存在か**。
18 暗褐　炭、焼土、黄褐色粘土ブロック状に混入する
19 暗褐　18に類似。混入物少ない。
20 黄褐　炭、焼土、黄褐色粘土ブロック状に混入する。**以下22層までSK97**。
21 褐　炭、焼土含む。
22 暗褐砂　焼土が若干混じる。
23 暗褐　ピット。下層を中心に礫あり。黄褐色砂質土や炭・焼土のブロックが混入。ややしまりあり。
24 暗褐　ピット。23に類似。暗灰色粘土が混じる。粘性が強い。ややしまりあり。
25 暗褐　炭、焼土、暗灰色粘土混じる。
26 暗褐　ピット（**SP173**）。28に比して明るい。焼土粒多く含む。
27 暗褐　27と同一。炭・焼土等が混入し、若干の汚れが目立つ。
28 暗褐　25に比して、砂の粒子が粗い。混入物も少なく、比較的均質。
29 褐砂　若干汚れが混じる。
30 黒褐　シルト質。粘性が高い。**SD50**。
31 黒褐　シルト質。粘性が高い。**SD51**。
32 褐　ピット。炭、暗黄灰色粘土ブロックが混入する。
33 褐　**SK83**。炭、暗黄灰色粘土ブロックが混入。礫を含む。
34 暗黄褐砂　以下、砂丘面。
35 暗褐砂　34と同質だが、若干汚れが混じる。
36 淡黄褐砂　粗砂層





1 黄褐・褐　互層状に堆積。
2 暗褐
3 暗赤褐
4 褐　炭、焼土、黄褐色粘土ブロック状に混入する。
5 暗褐　ピット
6 暗褐　粘性あり。炭混じる。
7 褐　炭、黄褐色粘土混じる。
8 暗褐　粘性強い。礫含む。**以下10層までSK**。
9 暗褐　８に似る。下部はやや砂質。
10 黄褐砂　地山に類似。
11 暗褐　炭含む。
12 暗褐　不明遺構。黄褐色粘土ブロック状に混入する。更に上面から切り込まれている可能性あり。
13 暗褐
14 暗褐
15 暗褐
16 黄褐砂　シルト質。粘性が高い。**SD41**。
17 黄褐粗砂　若干の汚れあり。砂丘上面

図３　土層（１/80）

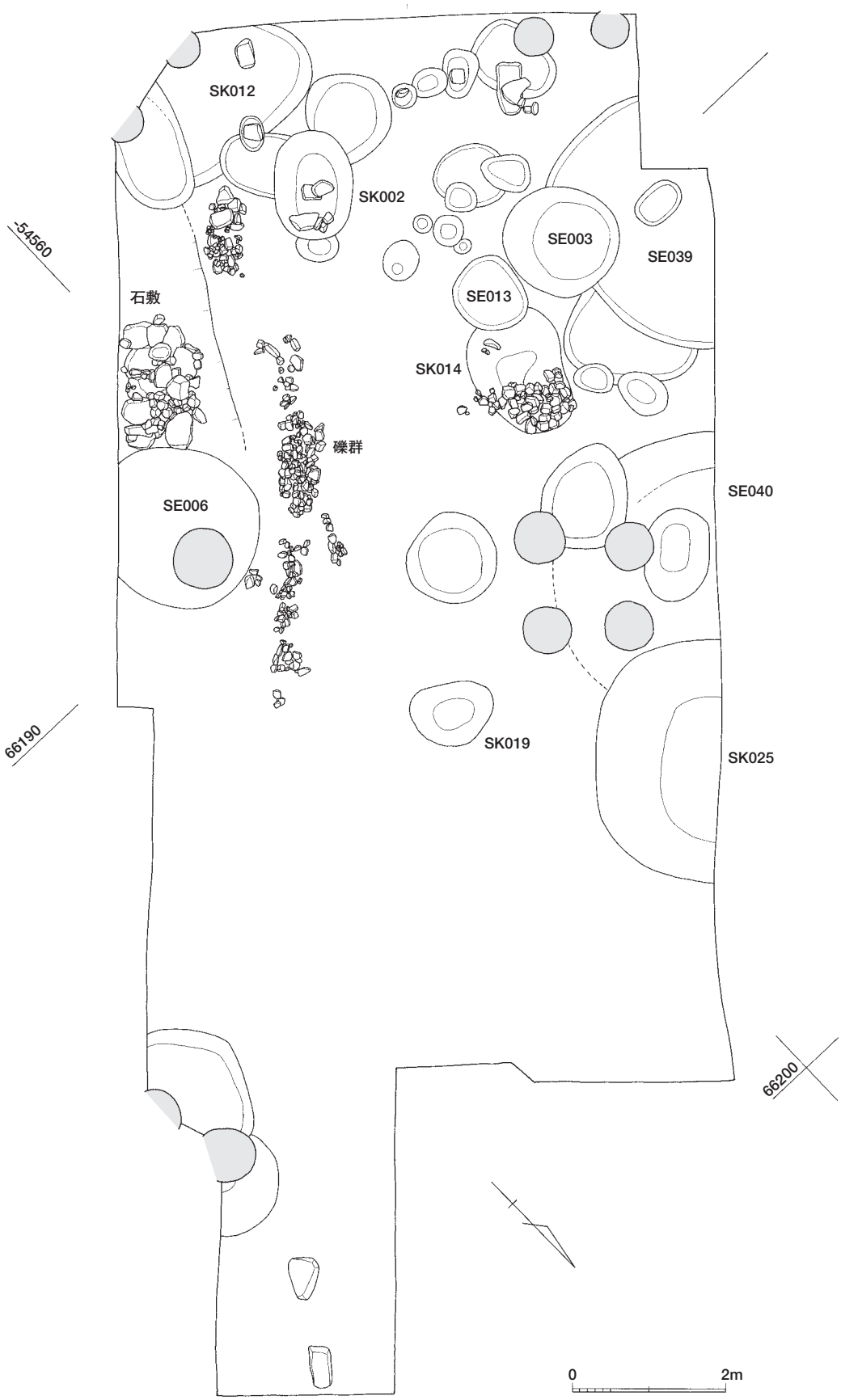


図４　第１面遺構配置（１/80）

２．第１面の調査

１）SE

SE003（図４）　調査区西寄りに存在。径1.5m、湧水が激しく完掘していない。SE039を切り込む。

出土遺物（図７）　瓦質土器の浅鉢（３）、・深鉢（４）、陶器（備前焼？）の浅鉢（２）・甕（５）がある。16世紀後半から17世紀の遺物といえようか。その他、白磁皿（１）も出土している。

SE006（図４）　調査区東端に位置する。径２ｍ程の円形を呈し、底面はコンクリ基礎のため不明である。石敷を切り込む。17世紀代に比定できる。

出土遺物（図７）　肥前陶磁等の椀・皿が出土している他、朝鮮陶磁器（粉青沙器）の皿（10）も存在する。

SE013（図４）　調査区中央やや西寄りに位置する。径１ｍ程の円形を呈し、底面近くでは湧水が激しく完掘していない。SK014を切り込む。16世紀中頃以降に位置づけることができる。

出土遺物（図７）　明代青花の皿（17）、の他、龍泉窯系青磁（13；Ⅲ－ｂ類）、土師器杯（15・16）・皿（14）が出土している。

SE039（図３・４）　調査区南西際に存在する。検出時は径３ｍ程だが、土層図をみれば更に大きくなり、本来はSE040と切り合いを有していたようだ。湧水のため完掘はしていない。

出土遺物（図８）　龍泉窯系青磁の椀・皿（１～３）、白磁椀（８）、土師皿（４）の他、備前焼の擂鉢（５）、瓦当（三巴文）（６）、平瓦（７）、小杯（９）等が出土。16世紀以降。

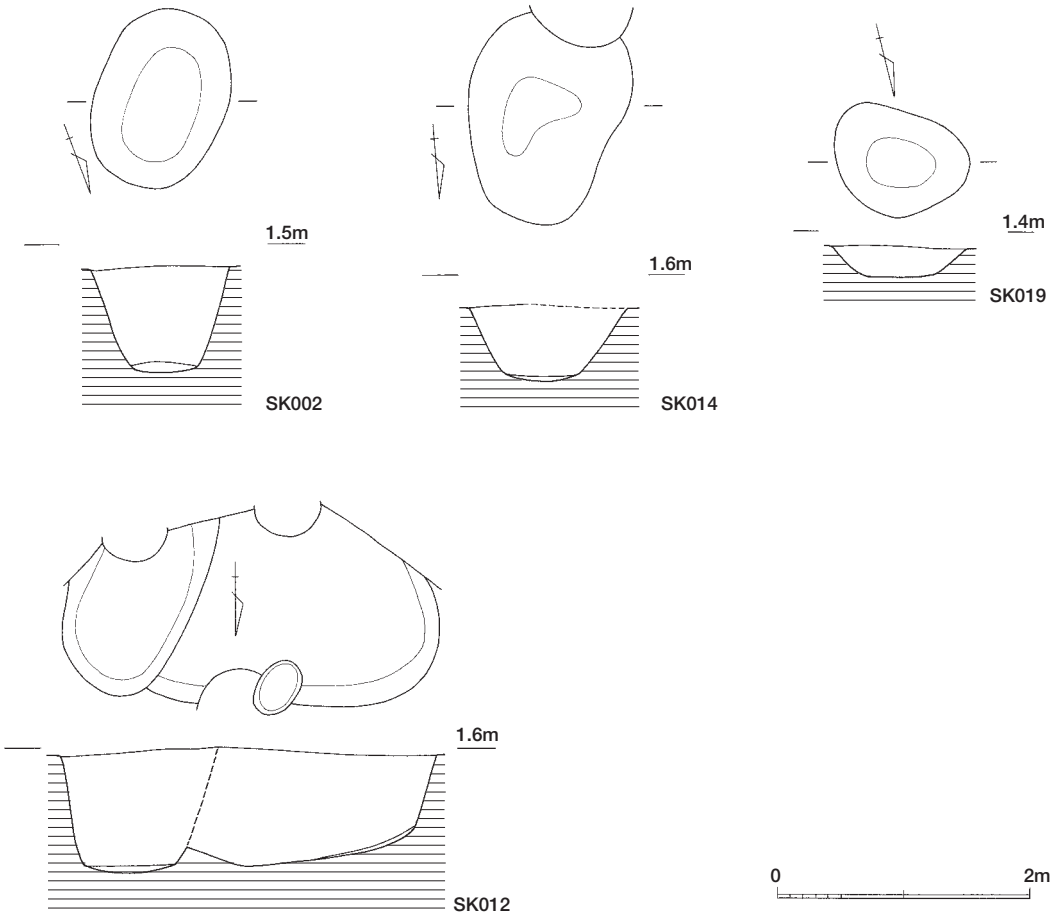


図５　第１面検出遺構（１/60）

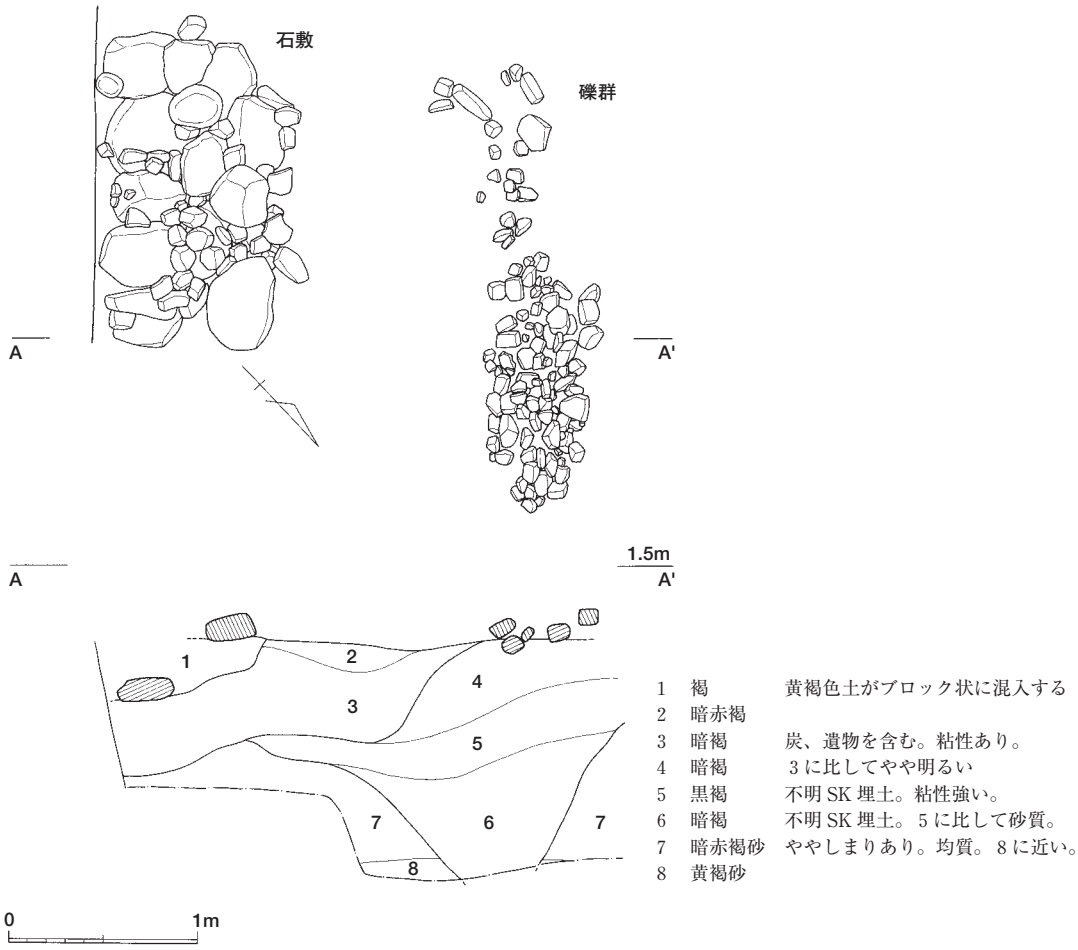


図6　石敷・礫群（1 /40）

SE040（図3・4）　調査区南西際に位置し、土層図をみればSE079に一部が切られていたようだ。コンクリ杭が存在するため、底面の状況は不明である。16世紀後半以降の遺構であるといえよう。
出土遺物（図8）　越州窯系青磁の底部片（14）の他、明代青花皿（13）、備前焼の擂鉢（10・11）、三巴文を有する瓦当（12）などが出土。

2）SK

SK002（図5）　調査区南西側に存在。平面は長さ1.4m、幅1.0mの楕円形を呈し、深さ0.8mを測る。埋土には暗黄褐色土のブロックを含み、上部は礫を多く含む。16世紀以降に位置づけることができる。
出土遺物（図8）　備前焼の擂鉢（16）、瓦質土器のこね鉢（17）、火鉢（18）、染付椀（15）が出土。

SK014（図5）　調査区中央の西寄りに位置する。平面は長さ1.7m、幅1.2mのいびつな楕円形を呈し、深さ0.6m。埋土には暗黄褐色土のブロックを含み、上層部分北側には多量の礫を含む。
出土遺物（図8）　瓦質土器の釜（21）、国産陶器の甕（19・20）等が出土。17世紀代に位置づけ可能だろうか。

SK012（図5）　調査区南側隅に存在する。全形は不明だが、深さ1.0mを測る。埋土には暗黄褐色土のブロックが多く混入する。
出土遺物（図8）　土師杯（22・23）・皿（24）、瓦質こね鉢（25）、須恵質擂鉢（26）が出土。

SK019（図5）調査区中央やや北寄りに位置する。平面は径0.8m程のいびつな円形を呈し、深さは0.2～0.3m程。遺物としては、土師杯（27）、染付皿（28）が出土している（図8）。

３）石敷・礫群（図６）

石敷　調査区中央の南より、調査区の際において検出した。SE006に切り込まれている。扁平な大形石材を１～２，3段重ねて敷き詰めており、その上部は平坦面をなしている。石の隙間には小石を充填する。石敷の造成時期を示す遺物は無いが、石敷に伴う造成土（１層）には第１面における他遺構の多くと同じく、黄褐色土ブロックが多く混入しており、従って石敷の造成時期もこれら遺構と同じく、近世以降に求めることができるだろう。

礫群　石敷の前面（北西側）では礫の集積が、所々で途切れながらも、北東－南西方向へ線状に分布している。これら礫は雑然としていて、貼石や敷石といった性格のものではないだろう。ただ、石敷前面にある落ち込みに沿って並んでいることには注意する必要があるかもしれない。

土層をみる限り、これら礫群は石敷よりは古く位置づけられるものである。しかし、これら礫群が例えばSK014中にある礫との関連で押さえることができるのであれば、礫群もさほど変わらない時期、近世以降のものであるといえるかもしれない。

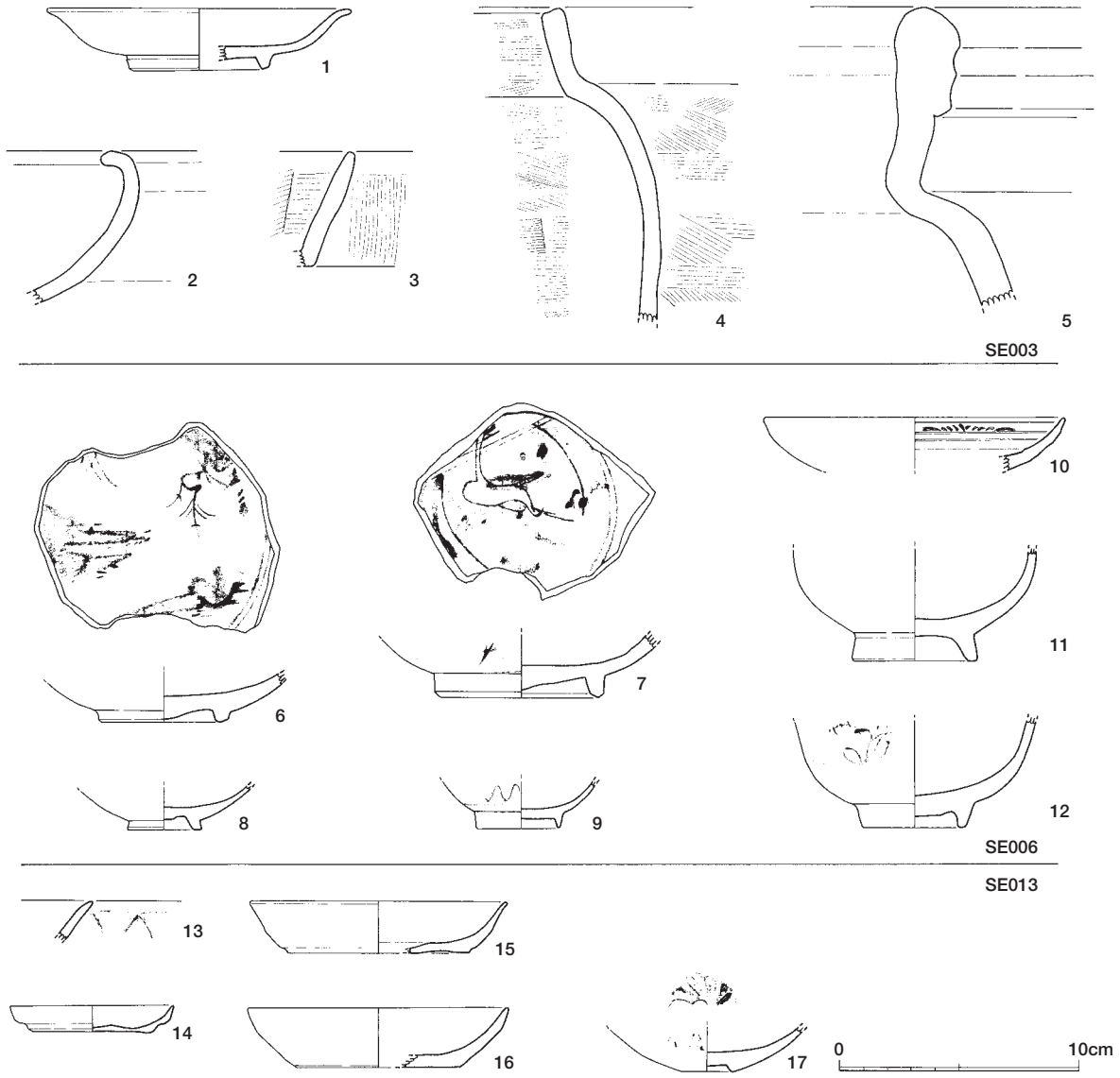


図７　第１面検出遺構出土遺物１（１／３）

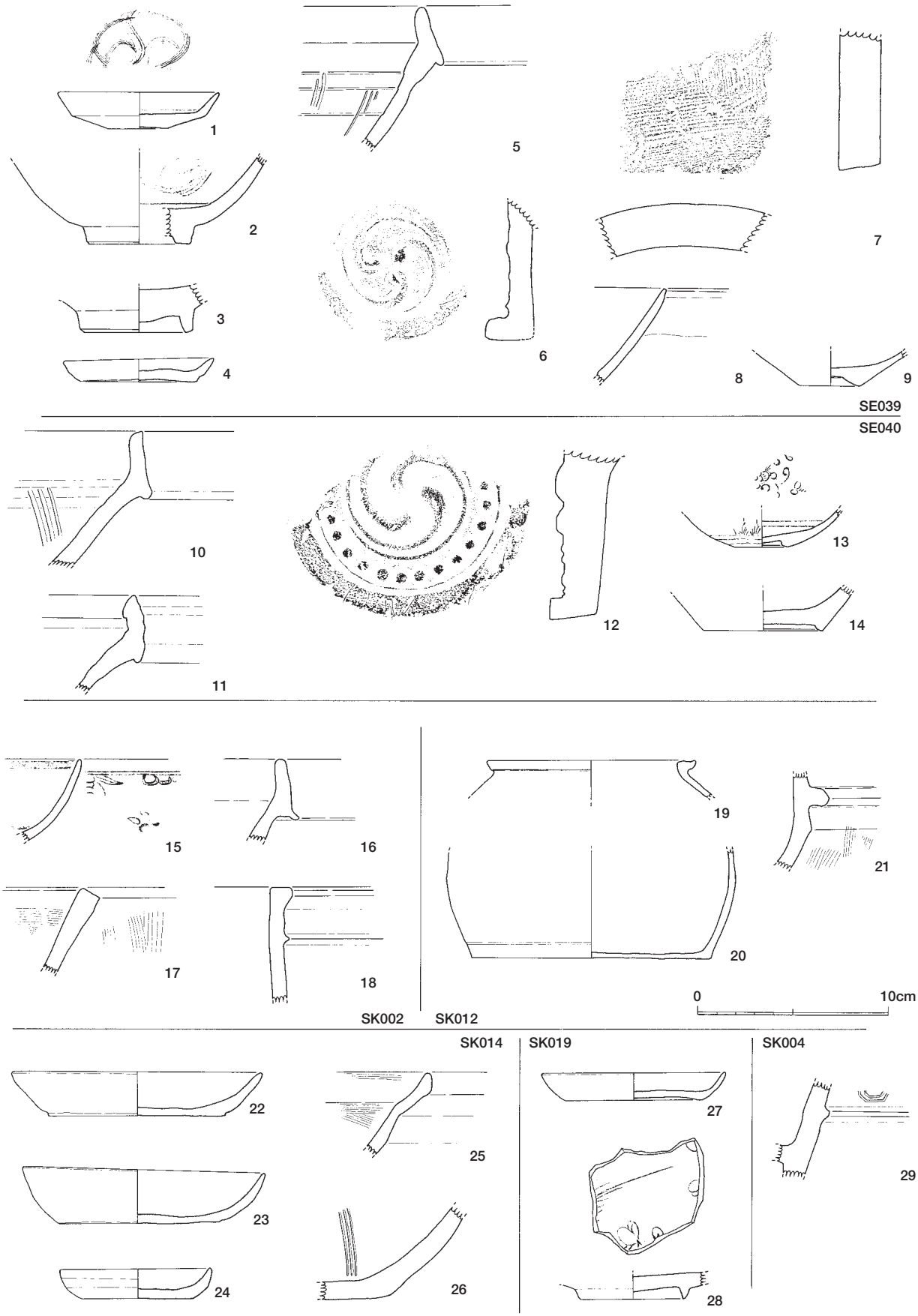


図８　第１面検出遺構出土遺物２（１／３）

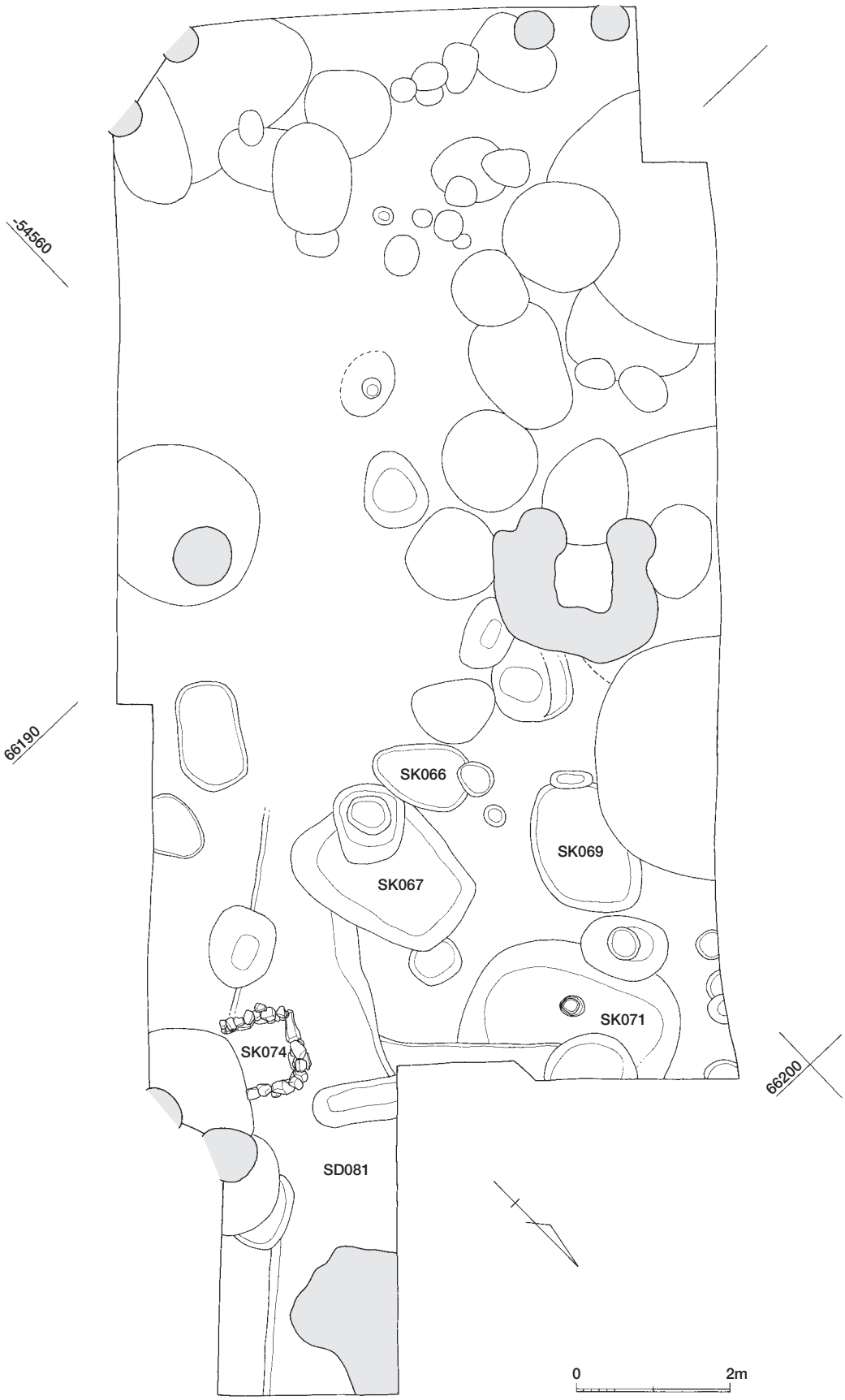


図 9　第 2 面遺構配置（1 /80）

3．第２面の調査

１）SK

SK074（石組遺構）（図10） 調査区北東側にて検出した。攪乱により東壁側を失う。内法は1.5×1.5m の方形プランで、高さは0.6m 程が遺存している。石組は３～４段目までが残る。雑然としているが、内面はある程度、平滑に整えられている。西壁石積みの下面は現状の床面より高く、本来の床面はもう少し高い位置にあった可能性も考えておきたい。この遺構の堀方はよく分からなかった。尚、確実にこの遺構に伴うと考えることのできる遺物は無かった。

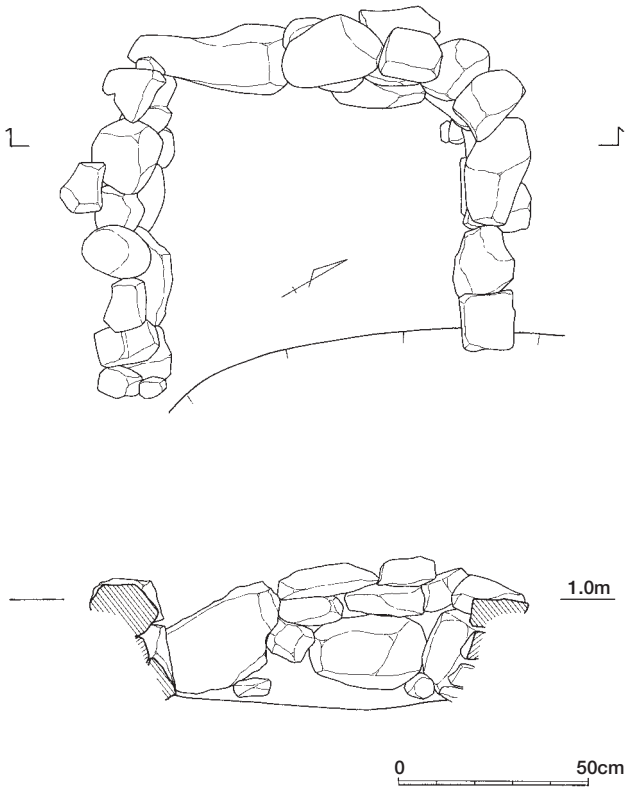


図10　第２面 SK074（１/30）

SK066（図11） 調査区中央やや南東寄りに存在する。長さ1.2m、幅0.8m を測る平面楕円形を呈し、深さ20cm 程。底面は平坦である。

出土遺物（図12） 土師杯（19)、白磁椀（21；Ⅳ類)、瓦器椀（22）他、備前焼？の壷（20）が出土している。

SK067（図11） 調査区中央やや南東寄りに存在する。長さ2.3m、幅1.7m を測り、深さ0.5m。壁面の立ち上がりは急で、底面は平坦である。17世紀以降に位置づけられる。

出土遺物（図12） 土師杯（９～13)、瓦質陶器のこね鉢（14)、擂鉢（15)、青磁小杯（17)、朝鮮陶器の小杯（18)、染付皿（16）がある。

SK069（図11） 調査区中央のやや北寄りに位置する。長さ1.7m、幅1.3m、深さ0.5m を測る。壁面の立ち上がりは急で、底面は平坦である。遺物は小片が多いため、図化していない。

SK071（図11） 調査区中央やや北寄りの調査区際に位置する。平面は径2.7m 程の円形を呈するものだろう。壁面の立ち上がりは急で、底面は平坦。13世紀前半に位置づけられようか。

出土遺物（図12） 龍泉窯系青磁椀（23；Ⅱ－ｂ類、27；Ⅰ類)、土師皿（24)、瓦器椀（25)、白磁椀（26；Ⅴ類）などが出土している。26の底部には墨書。

２）SD

SD081（図９） 調査区北東側を北東－南西方向に走るもので、幅２～１ m、深さ20cm を測る。南西側へ行くにつれて、次第に細くなっているようだ。埋土は暗褐色で遺構の認定が難しく、調査区中央部より南西側において、溝の存在は判然としない。

出土遺物（図12） 朝鮮陶器（粉青沙器）の椀（１)、青磁椀（２)、瓦質土器の火鉢（７)、擂鉢（８)、備前焼甕（６)、土師杯（３・４)・皿（５）等が出土している。

4．第３面の調査

１）SE

SE095（図13） 調査区北東側で検出したもので、長さ3.8m、幅2.4m の楕円形を呈する堀方を持つ

が、深さは20～30cmと浅い。壁面の立ち上がりもなだらかなものとなる。中央部には径0.8mの平面円形を呈する掘り込み部分があり、これが井筒に相当する。深さは0.6m程で、底面の標高は－0.5mである。井筒部分の周囲には一部木質も残っていたが、湧水のため完掘目前にして遺構が崩壊してしまったため、実測および資料の採取は行っていない。

出土遺物（図15）　白磁椀（21)、瓦器椀（22)、土師器杯（23)、皿（24)、温石（25；滑石製）が出土している。出土遺物は少ないが、12世紀代に位置づけ可能だろうか。

２）SK

SK042（図13）　調査区中央南寄りに存在するもので、SD050・058・098を切り込んでいる。平面は長さ２m、幅1.5m程の楕円形を呈し、深さは50cmを測る。出土遺物は細片が多く、時期比定には至っていない。

SK053（図13）　SD050中央部で検出したもので、径１m程の円形を呈している。深さは40cm程。SD050掘り下げ時に検出もので、SD050との切り合い関係については確認していない。立ち上がりは緩やかで、底面は狭い。12世紀代に位置づけることができる。

出土遺物（図15）　白磁椀（１；Ⅳ類、２；Ⅳ類)、皿（３；Ⅷ類）が出土している。中には、国産陶磁壷（４）も含まれるが、混入品である可能性が高い。

SK054（図13）　調査区南西寄りで検出したもので、平面は径１m程の円形を呈している。深さは90cmを測り、壁面の立ち上がりは急である。形状からみれば、井戸の井筒部分である可能性が高い。新相の遺物を評価すれば、この遺構は12世紀後半に位置づけることができる。

出土遺物（図15）　白磁椀（５・６・７)、緑釉陶器（８)、越州窯系青磁椀（９)・鉢（14)、瓦器椀（10)、土師器椀（11)・皿（12・13）が出土している。８は淡緑色を呈し、部分的に黄色の発色がある。焼成良好で堅緻。高台は貼付によるものである。

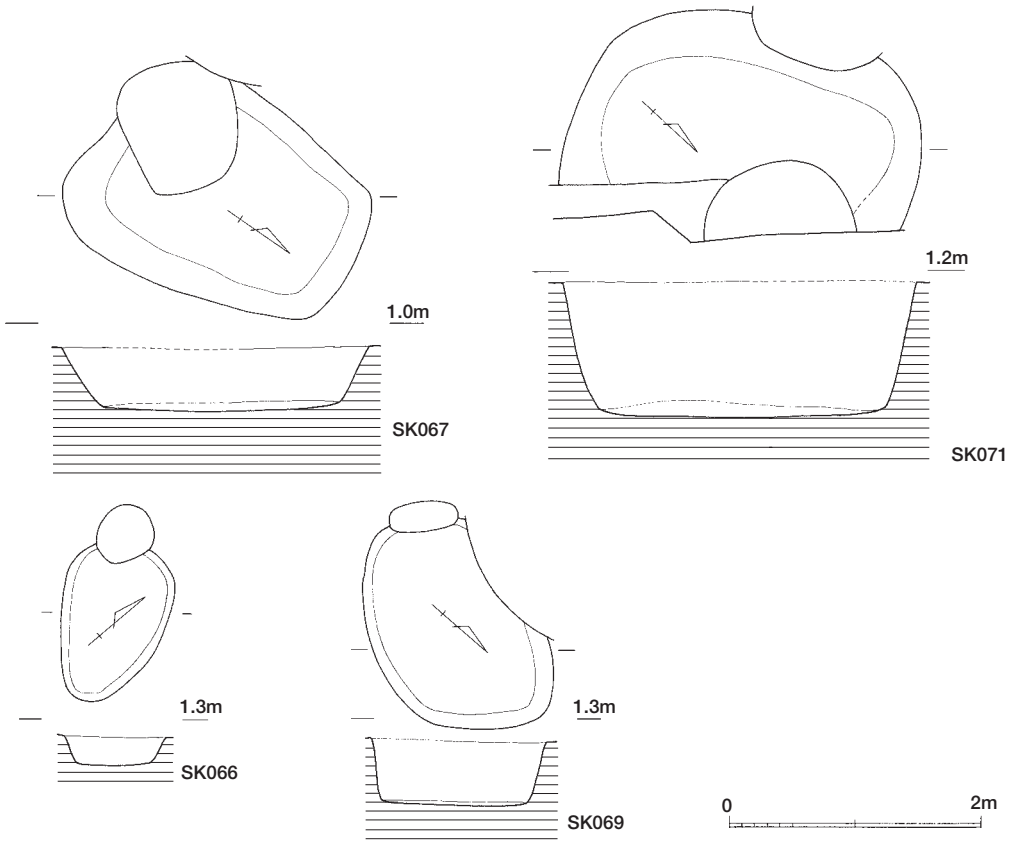


図11　第２面検出遺構（１/60）

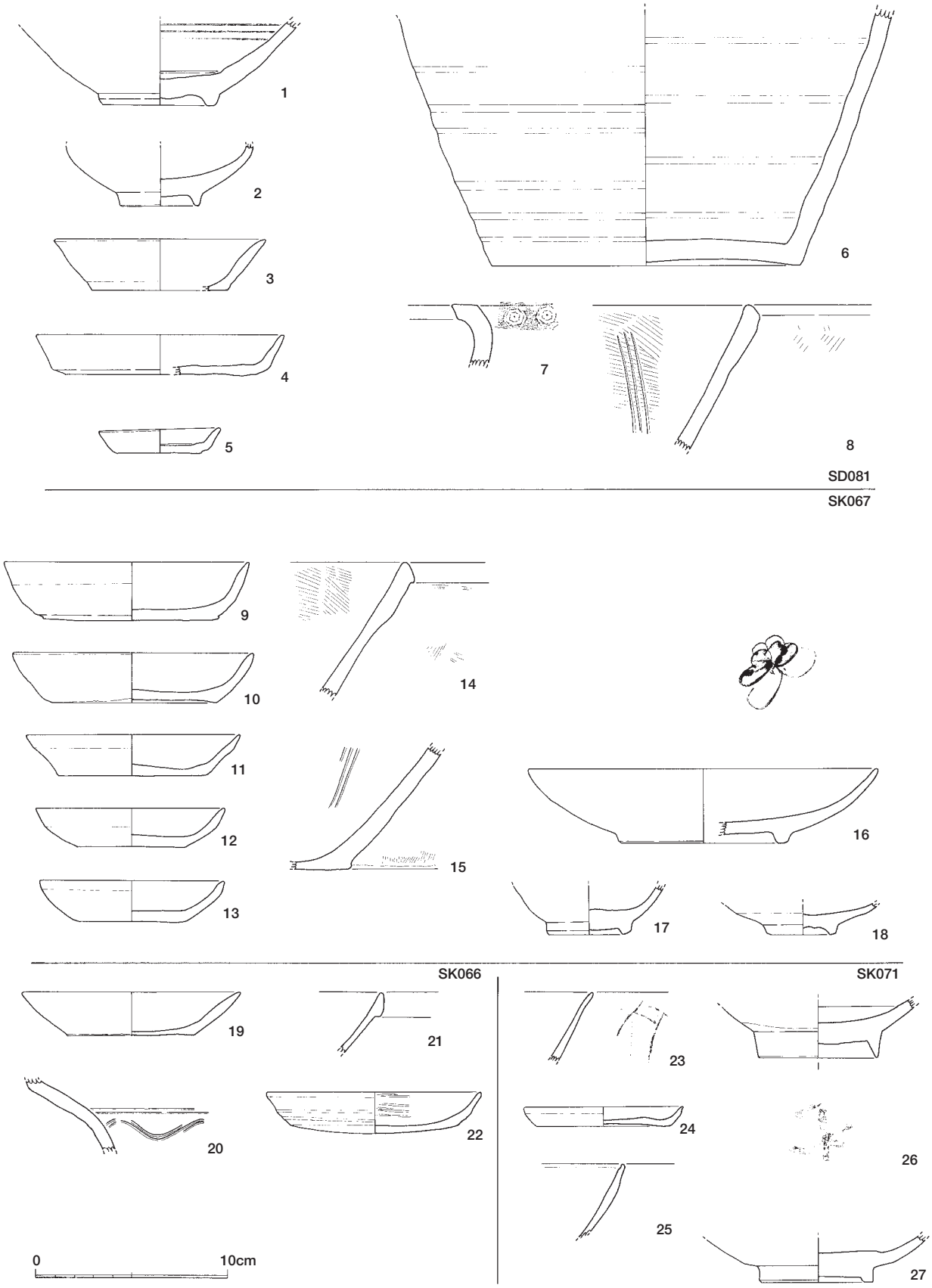


図12　第２面検出遺構出土遺物（１／３）

SK092（図13）　調査区中央東寄りで検出した遺構で、SD081、SK093を切り込んでいる。平面は径1.5mの円形を呈し、深さは0.4mを測る。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面は狭い。すり鉢形の形態をとっている。12世紀後半に位置づけることができる。

出土遺物（図15）　白磁椀（18；Ⅴ類）、龍泉窯系青磁（19；Ⅰ類）、須恵質鉢（20）、土師器杯（17）などがある。

SK093（図13）　SK092に近接して存在し､SK092に先行する。平面は径1.2m程の円形を呈し、深さは20cmと浅い。

出土遺物（図15）　出土遺物は少ない。白磁椀（15；Ⅳ類）、羽口（16）が出土している。

SK094（図13）　調査区中央北東寄りに存在するもので、SK067、SK071に切り込まれる。平面は径1.5m程の円形を呈し、深さは30cm程。壁面は西側が緩やかで、東側が急とアンバランスな形状をとる。出土遺物は少なく、図化していない。

３）SD

溝は大小あわせて８本検出している。方向は北東－南西方向と北西－南東方向の２つに分かれ、それぞれの溝が直交、もしくは平行するという規則性を持つ。

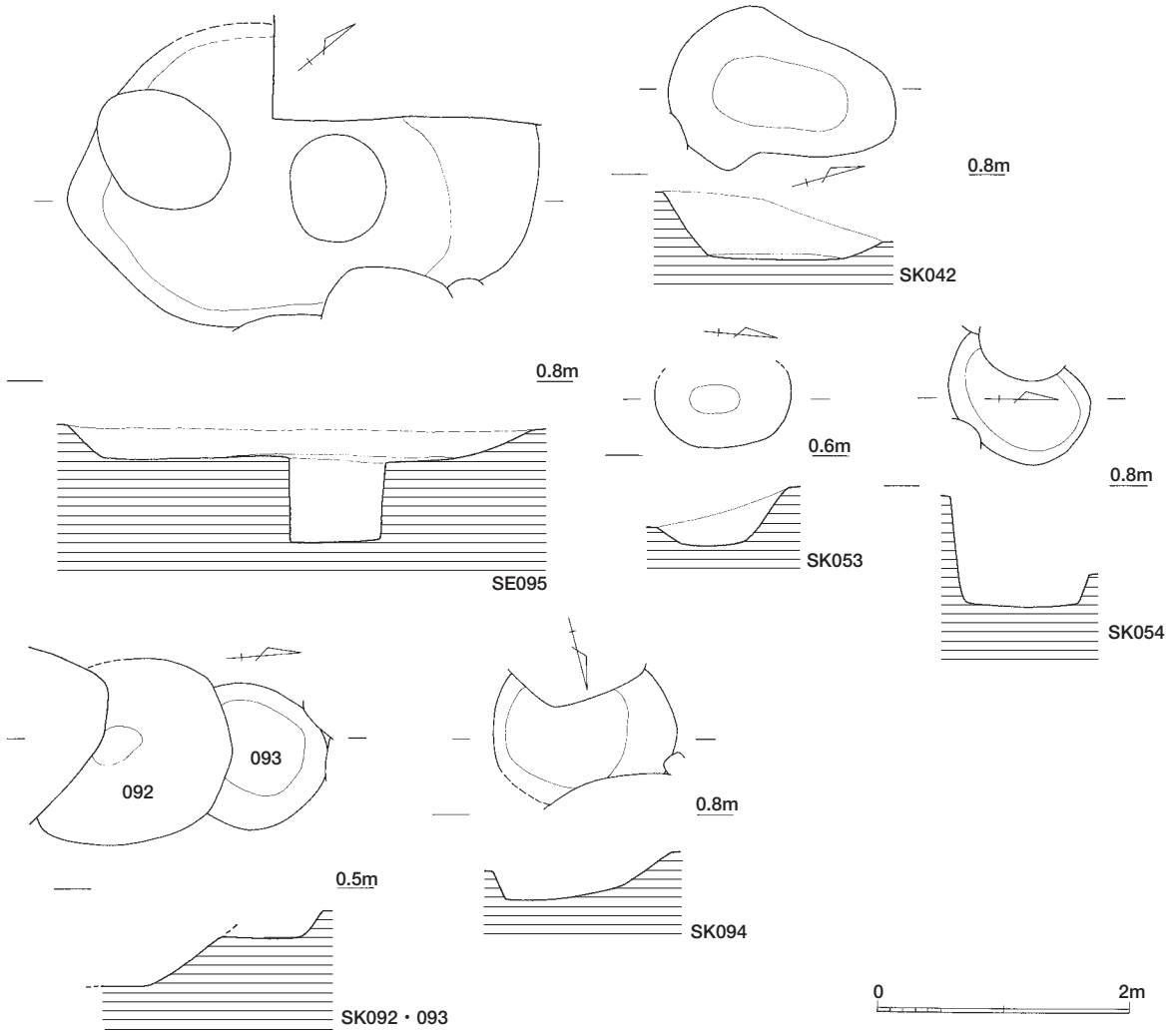


図13　第３面検出遺構（１/60）

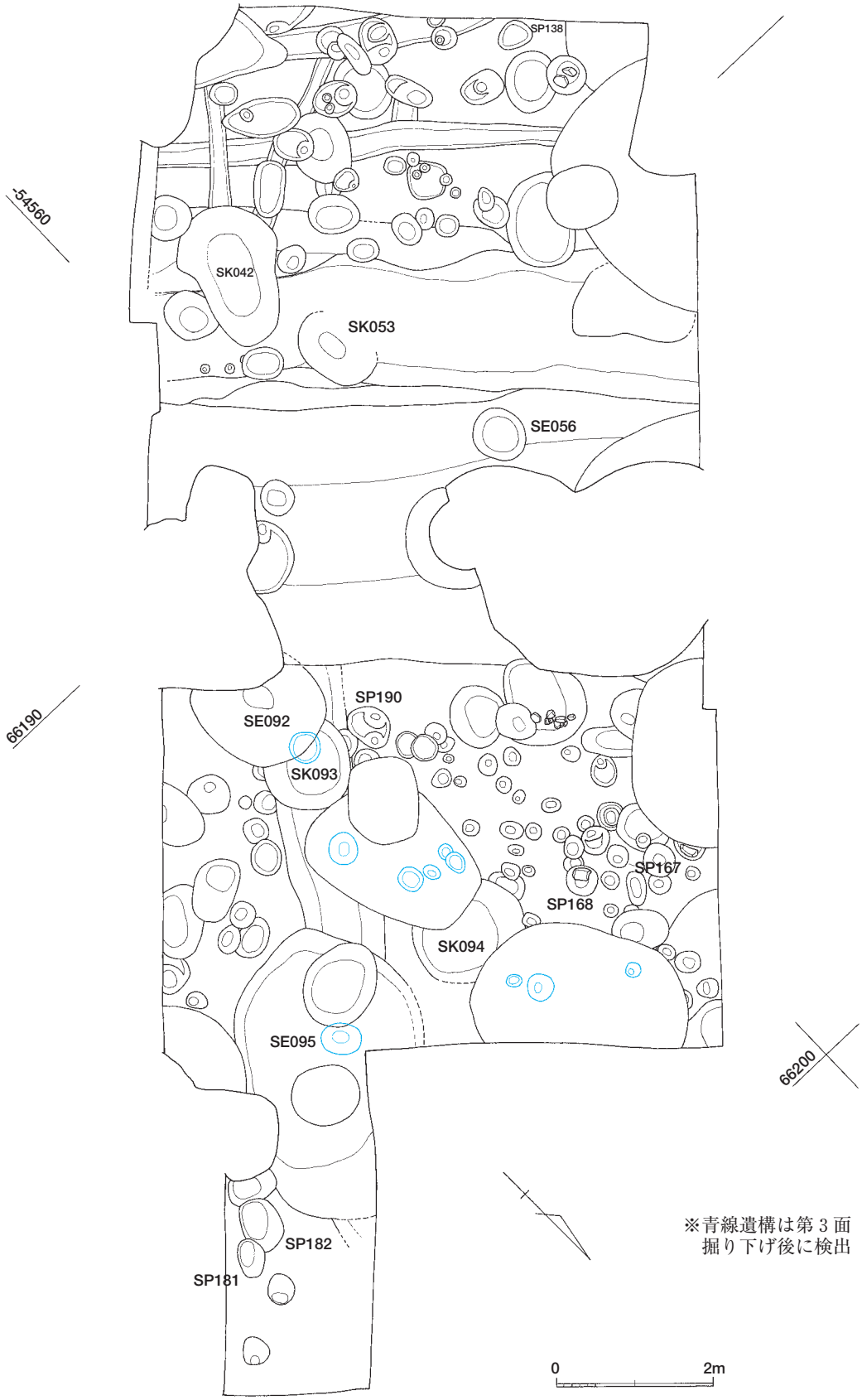


図14　第３面遺構配置（１/80）

SD050（図16）　調査区中央やや南寄りに存在する大溝で、幅2.6m、深さ0.6mを測る。北側にほぼ平行して走るSD051とはわずかに切り合いを有し、それによれば、SD050はSD051に後出することが分かる。底近くには黒褐色シルト質土が堆積しており、滞水していたことが分かる。壁面は始め緩やかな傾斜を示し、底面近くの高さ20cm付近から垂直に落ちる。土層を観察すれば、落ち部の壁際には黒色シルト質土が存在するから、この部分には板等の有機質で土留が行われていたことが推測でき、また底面にはいくつか小ピットが存在していることから、土留材は杭で固定されていたことが分かる。尚、底面はほぼ水平で目立った比高差はない。12世紀後半に位置づけることができる。

出土遺物（図17）　白磁（Ⅳ・Ⅷ類）の椀（１～３）・皿（８）・瓶（４）、龍泉窯系青磁（Ⅰ類）の椀（５・７）・皿（10）、同安窯系青磁（Ⅰ類）の椀（６）・皿（９）、瓦器椀（12～14）、土師器皿（11）・椀（15）、そして羽口（16）、石球（17；滑石製）がある。

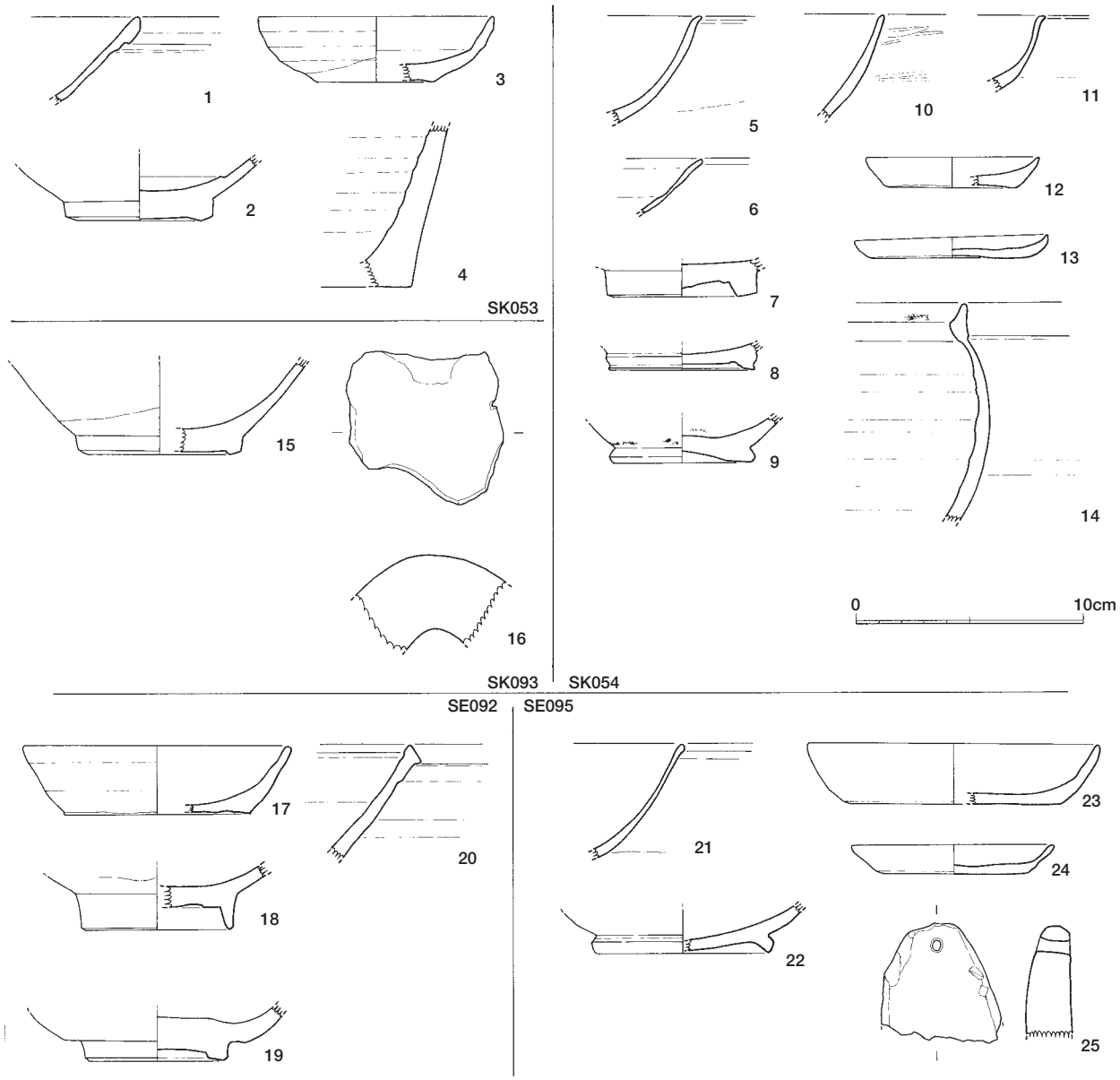
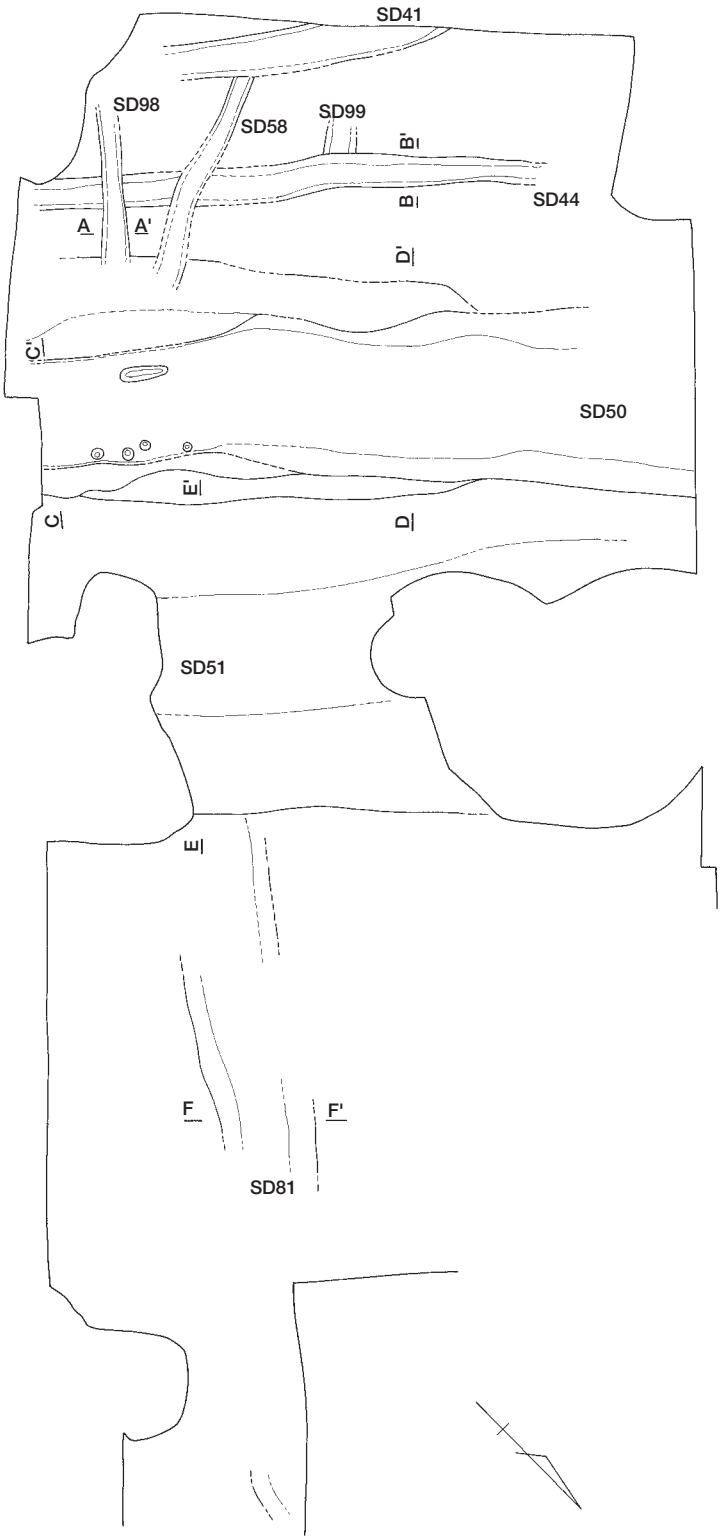
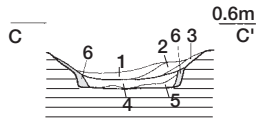
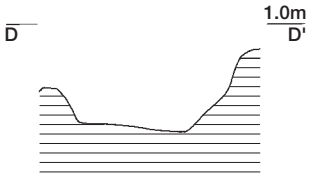


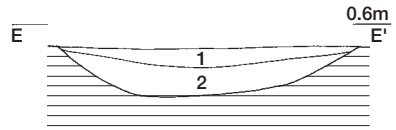
図15　第３面SK・SE出土遺物（１／３）



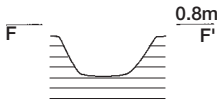


1　黒褐砂
2　褐砂
3　黒褐砂
4　黒褐シルト　粘性強い。有機質残る。
5　暗褐砂
6　黒褐シルト





1　暗褐砂
2　黒褐シルト　均質で粘性非常に強い。有機質残る。



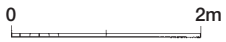


図16　第３面 SD（１ /80）

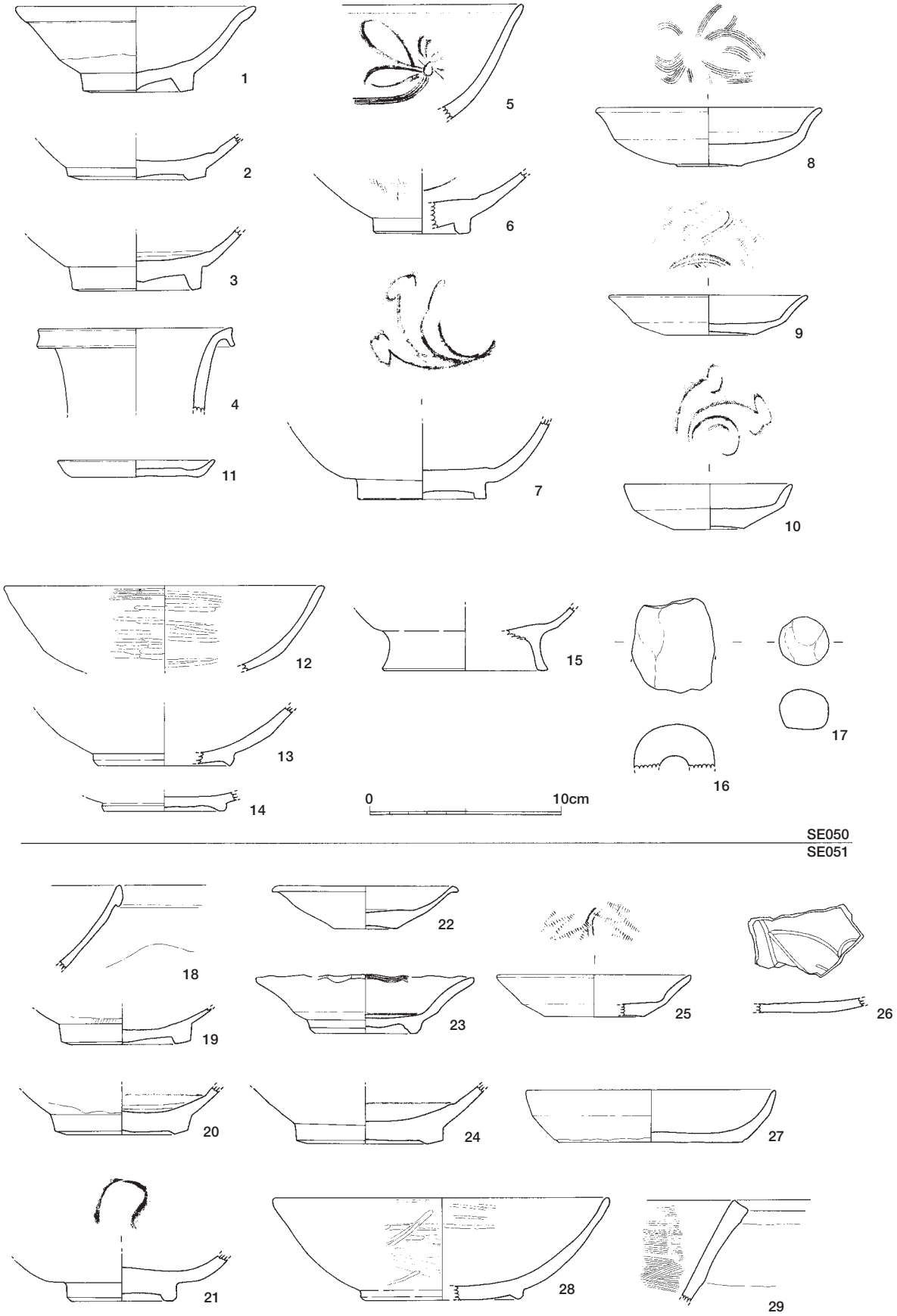


図17　第３面 SD050・051出土遺物（１／３）

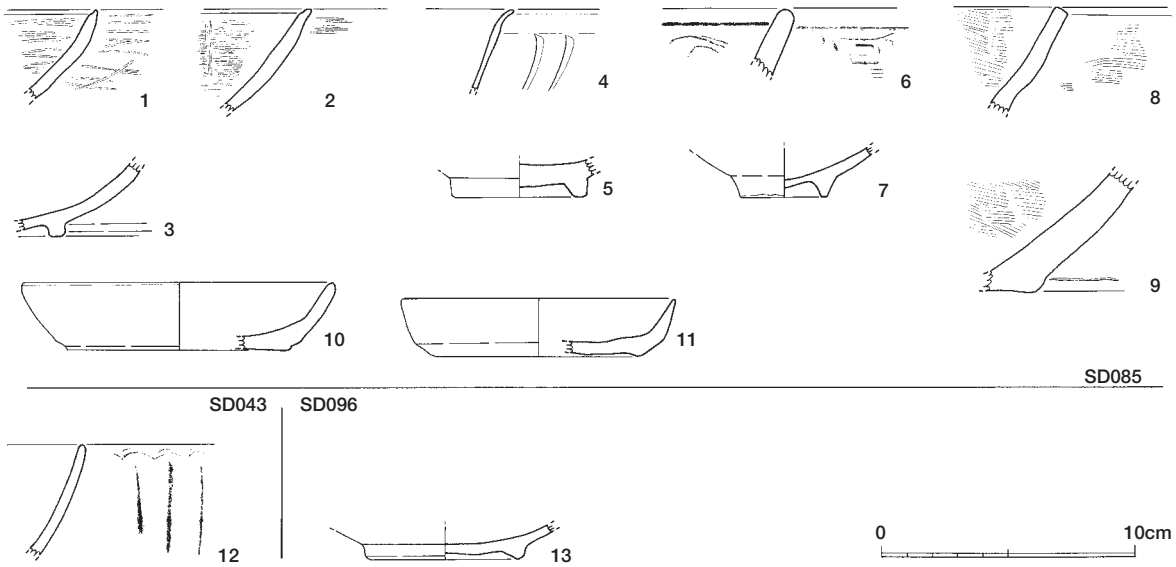


図18　第３面その他のSD出土遺物（１／３）

SD051（図16）　SD050の南側に存在する溝で、SD050に先行する。幅3.3m、深さ0.5mを測る。底には黒褐色シルト質土が堆積しており、滞水していたことが分かる。壁面の立ち上がりは緩やかで、SD051とは異なる。底面はほぼ水平。SD050と同じく、12世紀後半に位置づけることができる。

出土遺物（図17）　白磁（Ⅳ・Ⅷ類）の椀（19・19・20・24）・皿（22）、龍泉窯系青磁椀（21；Ⅰ類）、同安窯系青磁皿（25；Ⅰ－１ｂ類）、磁州窯系緑釉陶器の盤（26）、瓦器椀（28）、瓦質土器こね鉢（29）、土師器杯（27）等が出土している。

SD081（図16）　調査区中央北東よりで検出した溝で、幅１ｍ、深さ0.4mを測る。本来SD051等他の溝と切り合いを有していた、可能性が高いが、検出できたのは４ｍ程であり、他溝との切り合いは不明である。出土遺物はごく少なく、図化していない。

その他のSD（図16）　調査区南西側で、計５本の溝を検出している。北東－南西方向に走るものが３本、北西－南東方向のものが２本である。前者が幅0.2m程であるのに対し、後者は0.4mとやや幅広である。深さはいずれも0.1～0.2mを測る。切り合いをみれば、前者－後者の違いは時期差では無いようだ。SD050・051といった大溝との関係は不明だが、SD058とSD098の一部がSD050に由来すると考えることのできる落ち部を切り込んでおり、これら溝はSD050に後出する可能性もある。これら溝は切り合い関係にあり、当然時期差が存在するが、出土遺物をみる限り、おおむね11世紀後半～15世紀の範疇で考えることができる。

出土遺物（図18）　SD085からは、瓦器椀（１～３）、白磁椀（４；Ⅴ－２類）、青磁椀（５・６）・小椀（７）、瓦質土器こね鉢（９）、土師器杯（10・11）、土師器甕口縁部（８）等が、SD043からは青磁椀（12）、SD096からは瓦器椀（13）がそれぞれ出土している。６は外面に雷文帯、12は線描蓮弁文をそれぞれ施す。

４）SP（図16）

第３面では多くのピットを検出している。出土遺物をみれば、多くは11世紀後半～12世紀に位置づけることができるようだ。

出土遺物（図19上）　白磁椀（１；Ⅳ類、２・３・５；Ⅷ類）、龍泉窯系青磁椀（７；Ⅰ類）、土師器杯（９・10）・皿（６・８）、瓦器皿（11）などが出土している。１・２・４はSP168、３はSP167、５～７はSP181、８～10はSP182、11はSP190よりそれぞれ出土。

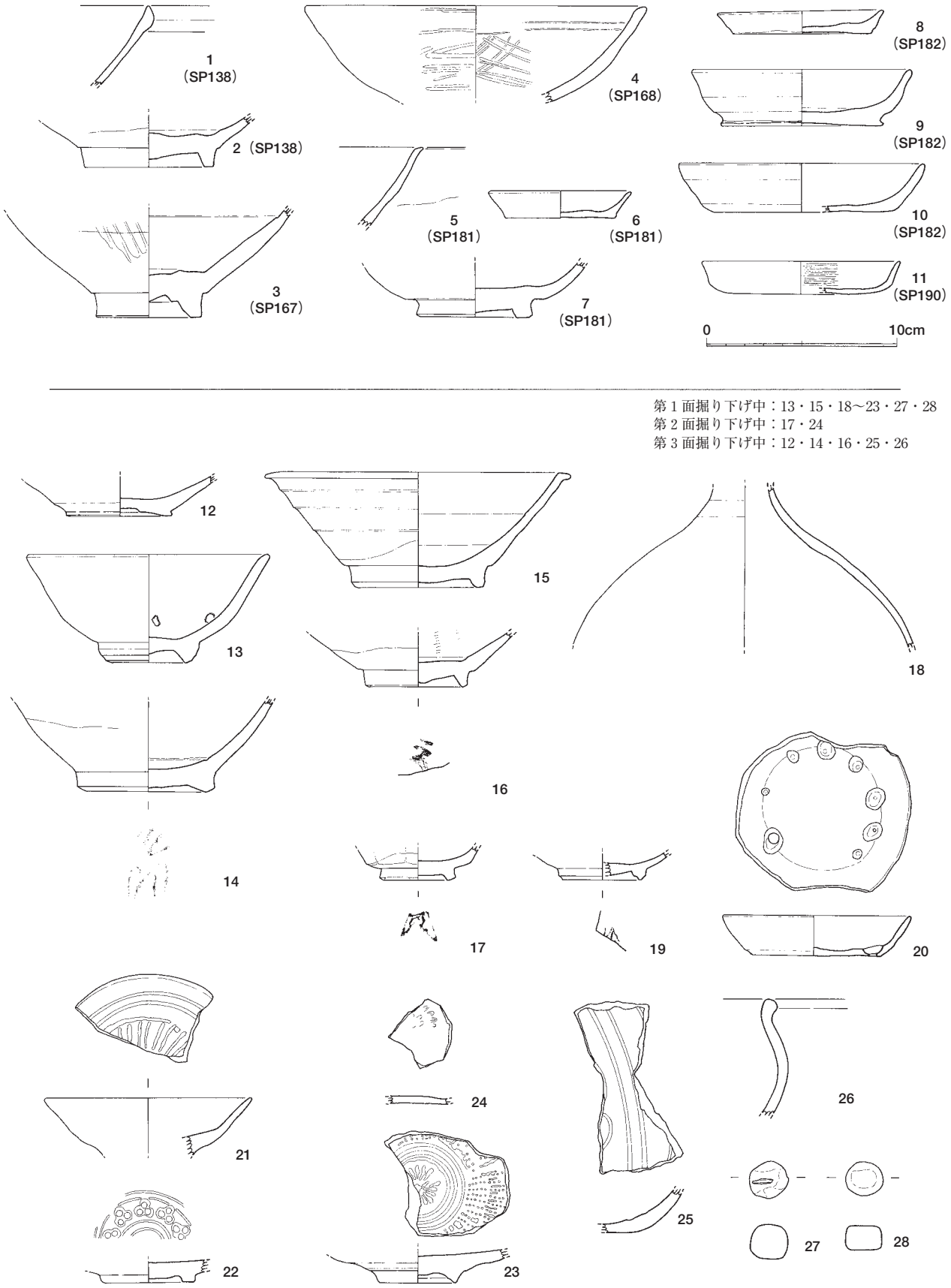


図19　SP・遺構面掘り下げ中出土遺物（１／３）

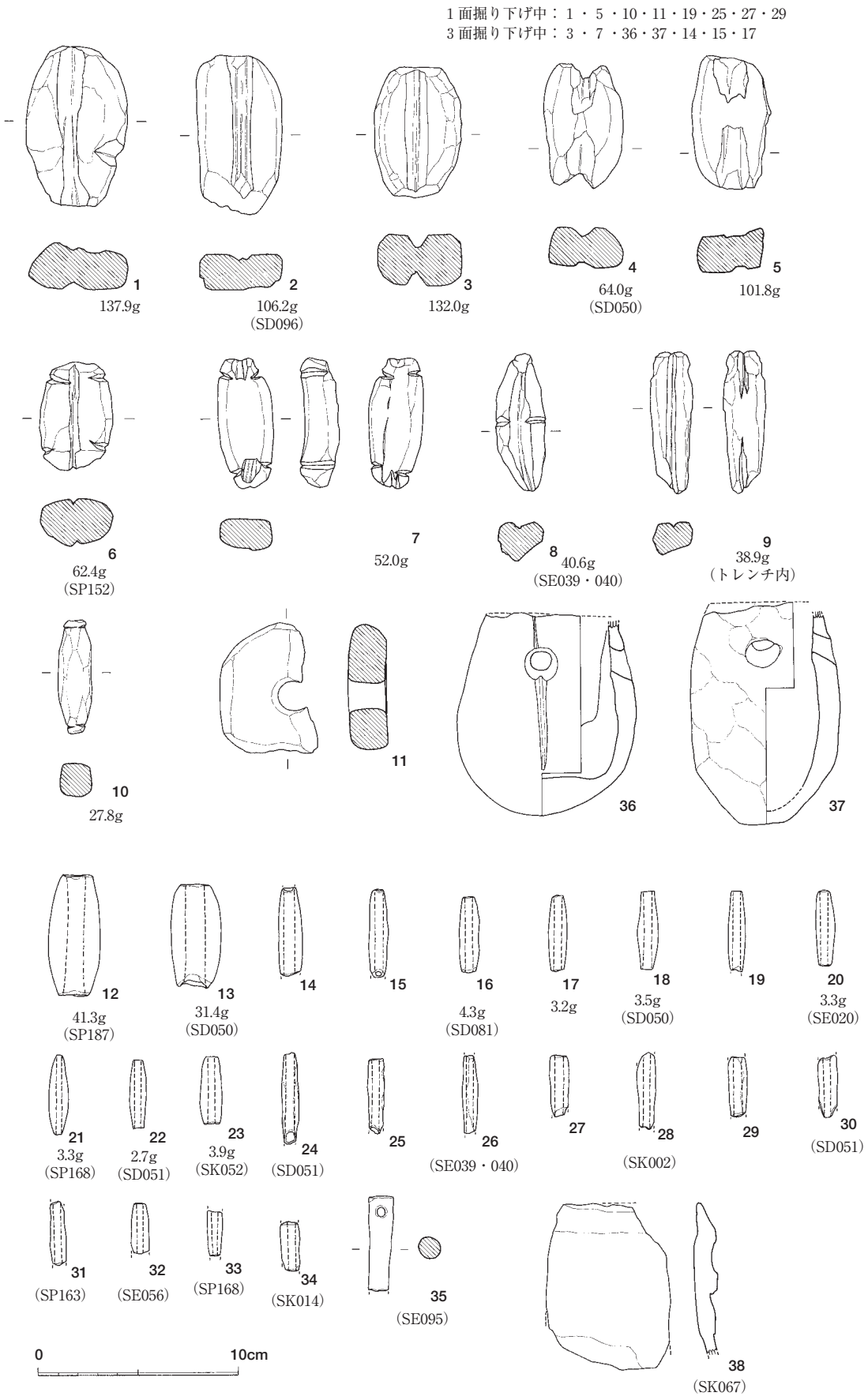

1 面掘り下げ中：1 ・ 5 ・10・11・19・25・27・29
3 面掘り下げ中：3 ・ 7 ・36・37・14・15・17
1
137.9g
2
106.2g
(SD096)
3
132.0g
4
64.0g
(SD050)
5
101.8g
6
62.4g
(SP152)
7
52.0g
8
40.6g
(SE039・040)
9
38.9g
(トレンチ内)
10
27.8g
11
36
37
12
41.3g
(SP187)
13
31.4g
(SD050)
14
15
16
4.3g
(SD081)
17
3.2g
18
3.5g
(SD050)
19
20
3.3g
(SE020)
21
3.3g
(SP168)
22
2.7g
(SD051)
23
3.9g
(SK052)
24
(SD051)
25
26
(SE039・040)
27
28
(SK002)
29
30
(SD051)
31
(SP163)
32
(SE056)
33
(SP168)
34
(SK014)
35
(SE095)
38
(SK067)
0
10cm

図20　漁撈具など（1 / 3）

５．特記遺物

１）包含層出土の遺物

各遺構面の切り下げの際、多くの遺物が出土している（図19下）。その内、特徴的なものについて以下に述べることにする。尚、出土層位については図19に示している。

12は越州窯系青磁椀（Ⅰ類）。14～17・19は白磁。14（Ⅷ類）・15（Ⅷ類）、16（Ⅵ－１ｂ類）は椀で、14・16は墨書を有する。17は小形の多角杯、19は小形杯で、共に14世紀後半から15世紀に位置づけられる。底面に花押有り。18・21～23は朝鮮陶器。18は緑褐釉陶器の壷。21～23は粉青沙器。24～26は磁州窯系緑釉陶器の盤である。20は土師器杯であるが、内面底部に計８つの穿孔もしくは窪みを有する。27・28は石球。滑石製。

２）漁撈など関係遺物

今次調査では石錘、土錘、蛸壺等、漁撈関係の遺物が多数出土している（図20）。ここでまとめて報告することにする。重さ、出土地点は図20に記した。

石錘（１～11）　いずれも滑石製。100gを超える大型のもの（１～５）から30gに満たないもの（10）までがある。１）主軸方向に溝や切目を持つものと、２）両端に横方向の溝を持つもの（10）、３）環状を呈するもの（11）に大別でき、前者は、a）他の溝・切目を持たないもの（１～５）、b）両端部に横方向の切目を有するもの（６・７）、c）中央部に切目を有するもの（８）に細分される。８・９は石鍋の転用品である。

土錘（12～35）　12～34は管状土錘、35は双孔棒状土錘である。管状土錘には重さ30～40gを測る大形のもの（12・13）と３～４ｇ程の小形のものがある。

蛸壺（36・37）　器高が低めで、下方ふくらみを持つもの（36）と砲弾形の細身のもの（37）の２つがある。いずれも紐掛け穴を有する。36は孔の上下縦方向に切目がついている。

その他、焼塩壷も出土している（38）。

３）銅銭

12枚の銅銭が出土した。銭銘と枚数を表１に、遺構別の出土銭銘を表２に示す。図21には主要なものの拓本、または透過Ｘ線写真を付した。図21の数字は表２の番号に対応する。　（片多雅樹）

Ⅳ　おわりに

今次調査では、第３面において12世紀代を中心とする多くの遺構を検出することができた。２つの大溝（SD050・051）は、100次調査で検出されたそれとほぼ直交する関係にあり、両者の関連が指摘できる。その性格の究明が今後の課題といえよう。

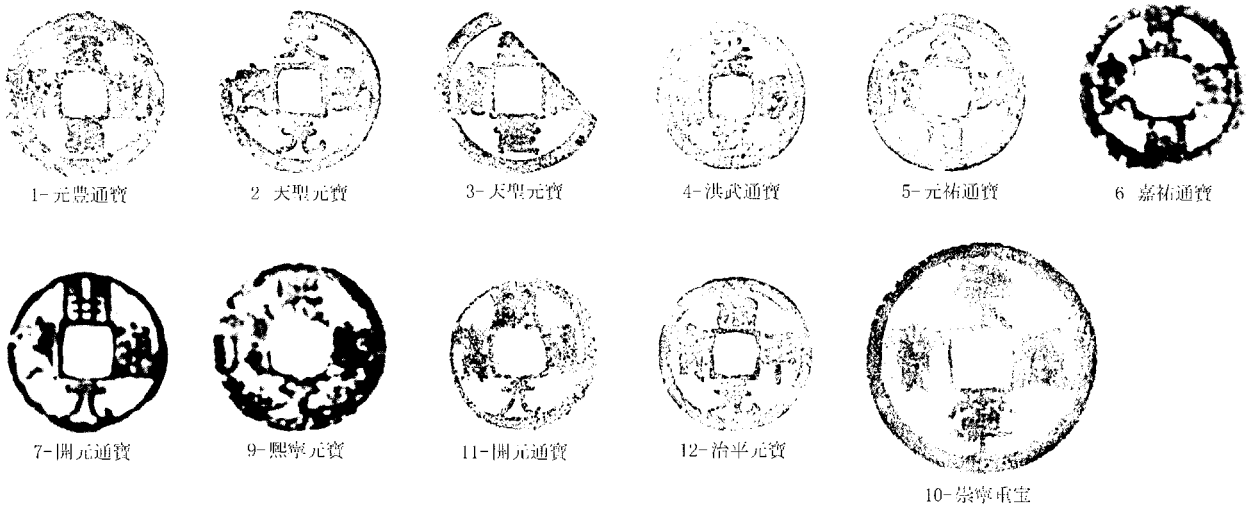


図21　出土銅銭（１／１）

図版１

第１・２面調査区南西側（北から）

図版 2

第１・２面調査区北東側（北東から）

第１・２面調査区北東側（南から）

石敷・礫群（南西から）

SK074（南東から）

SK071（南から）

図版 4

第 3 面　調査区南西側（北東から）

第 3 面　調査区南西側（北から）

第 3 面　調査区北東側（南から）

第 3 面　調査区北東側（西から）

図版 6

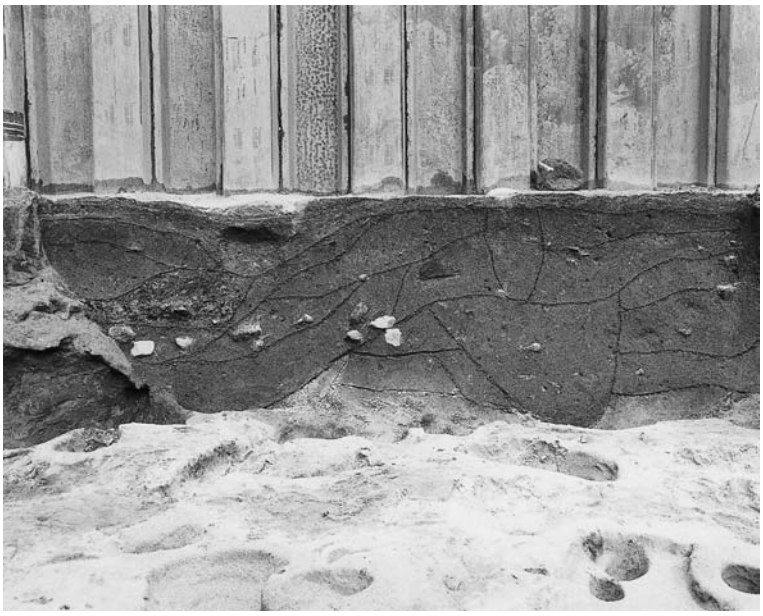
第 3 面　検出 SD（南から）

SD050・051（西から）

SD050（北西から）

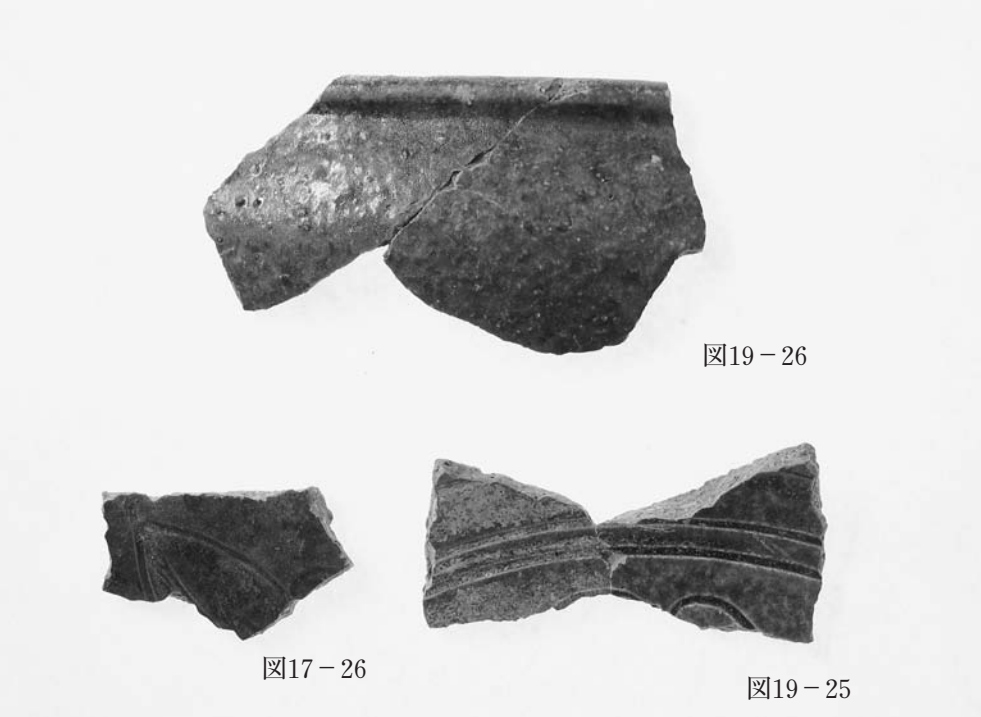
SE095（南から）

第 3 面ピット群（北西から）



土層（北東から）

図版 8



出土遺物

表１　銭銘別出土銅銭一覧表

銭　銘	初鋳年	時代	枚数	銭　銘	初鋳年	時代	枚数	銭　銘	初鋳年	時代	枚数
開元通寶	621	唐	2	熙寧元寶	1068	北宋	1	洪武通寶	1368	明	1
天聖元寶	1023	北宋	2	元豊通寶	1078	北宋	1	欠　損			1
嘉祐通寶	1057	北宋	1	元祐通寶	1093	北宋	1				計12枚
治平元寶	1064	北宋	1	崇寧重寶	1104	北宋	1				

表２　遺物別出土銅銭一覧表

No.	出土遺構	銭　銘	備　考	No.	出土遺構	銭　銘	備　考
1	SE005（表面）	元豊通寶		7	SK022	開元通寶	
2	SE020	天聖元寶		8	SK069	□×××	欠損
3	SE026	天聖元寶	1/4欠損	9	1面掘り下げ中	熙寧元寶	
4	SE040	洪武通寶		10	1面掘り下げ中	崇寧重寶	当十銭
5	SK002	元祐通寶		11	2面掘り下げ中	開元通寶	鋳込みずれ　私鋳銭か
6	SK014	嘉祐通寶	湾曲変形	12	礫群下掘り下げ中(1,2面)	治平元寶	

□ :判読不能　× :欠損

報 告 書 抄 録

ふ り が な	はかた
書　　名	博多108
副 書 名	博多遺跡群第150次調査報告
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第894集
編 著 者 名	藏冨士　寛
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810－8621　福岡県福岡市中央区天神１－８－１　TEL 092－711－4667
発 行 年 月 日	平成18年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
博多遺跡群（はかたいせきぐん）	福岡県福岡市博多区中呉服町66番（ふくおかけんふくおかしはかたくなかごふくまち）	4013	0121	33° 35' 56"	130° 24' 34"	2005.1.17 ～ 2005.3.29	120㎡	共同住宅 建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主　な　遺　物	特　記　事　項
博多遺跡群	集落	中世	溝・井戸・土坑	輸入陶磁器　国産陶磁器 土師器　瓦器　瓦質土器 石錘　土錘	

要　　約	今回の調査では３面を中心として、中世前半期を中心とする多くの遺構を検出することができた。２つの大溝は100次調査で検出されたそれとほぼ直交する関係にあり、両者の関連が指摘できる。

博多108

2006年（平成18年）３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　髙松印刷有限会社
福岡市東区松島１丁目４－10

遺跡名	遺跡略号	調査番号
博多遺跡群第150次	HKT－150	0479

福岡市埋蔵文化財調査報告書第八九九集

二〇〇六

福岡市教育委員会